B3-5

頭部外傷後遷延性意識障害患者における肺炎罹患状況—経時的調査と発生要因の検討—

○大塚 誠士、岩井 歩、田原 香里、森 美香、伊藤 純一
横山 奈美、槇林 優、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院　中部療護センター

【はじめに】頭部外傷後遷延性意識障害患者は臥床状態を余儀なくされる為、肺炎発症リスクが高い。今回、中部療護センター入院患者の肺炎罹患状況について調査し肺炎発症の予測と呼吸リハビリテーションの活用方法について検討したので報告する。

【対象】Ｈ１９年～Ｈ２５年に当センターＢチームに入院していた頭部外傷後遷延性意識障害患者４０例。

【調査 1】対象者の肺炎罹患歴を診療録より調査し、２年間の合計を表した総罹患数と２年間の入院期間を半年ごとに４分割した経時的罹患数をそれぞれ算出した。結果、総罹患数は４０例中１８例（４８％）で、経時的罹患数は入院～半年(以下入院初期)では１２例（３０％）、半年～１年では９例（２２％）、１年～１年半では６例（１５％）、１年半～２年では４例（１０％）と入院経過とともに低下傾向を示した。

【調査 2】調査１の結果から入院初期に焦点をあて入院初期における肺炎罹患要因を調査した。調査項目は入院時の年齢・気管切開・呼吸器疾患既往歴・ナスバスコア・アルブミン値・経口摂取・Ｂａｒｔｈｅｌ　Ｉｎｄｅｘの７項目とし、入院初期における肺炎罹患の有無との関連について検討した。統計解析はＭａｎｎ—ＷｈｉｔｎｅｙのＵ検定を用い有意水準は５％とした。結果、「気管切開」・「呼吸器疾患既往歴」・「高いナスバスコア」の３項目で有意差を認めた。

【考察】本調査の結果より入院初期の肺炎罹患数が減少すれば総罹患数も減少する可能性が示唆された。また入院初期に気管切開を有し、ナスバスコアが高く、呼吸器疾患の既往がある患者に対しては予防的に呼吸リハビリテーションを実施する事で総罹患数低下に繋がる可能性が示唆された。